

詩編 第66編 1節

「全地よ。神に向かって喜び叫べ。」

まことに大胆な歌である。全地を誘う呼びかけである。全地をどのように見  
ていたのか、歌い手が立つ所を見渡しての呼びかけであろうか。それとも、未  
だ見ていない所を押さえての誘いであろうか。さらには、見果てぬ天空を、宇  
宙を見上げての歌であろうか。歌い手がどこに立っているのかは推測するしか  
ない。しかし、明確なのは御前に立っていることである。天地万物を創造され  
たお方の前に立つのである。それならば、すべてに向かい呼び掛ける歌と言え  
る。

共に歌おうと誘うが、向いている方向は誘おうとしている人々の側ではない。  
歌い手が向かっているのは神である。ひたすら神に向かい叫び、歌うのである。  
それを聞く者たちは、歌い手、誘い手が見ている神を見上げることになる。そ  
うなると、共に歌わざるをえなくなる。それでよいのだ。誘っている人々を説  
き伏せ、歌わせる必要など無い。

神に向かうならば、喜びが湧き、共に喜ぶことになる。そして、さらには喜  
びが叫びとなる。叫びになってしまう。その喜びの叫びが全地に響きわたる。  
ただ一人の者であっても、その喜びの叫びを歌とするとき、全地が黙すること  
はない。神が民の声を引き上げる。

2021年12月2日